

# 大村ボートレース場ものがたり

昭和27年4月6日、日本で初めてボートレースが開催された大村ボート場。その開催には多くの苦難があり、その苦難に立ち向かった人たちの熱いドラマがあります。

ボートレース発祥の地は大村市です。なぜ最初の開催が大村市のボート場ではなく、当大村市だったのでしょうか？

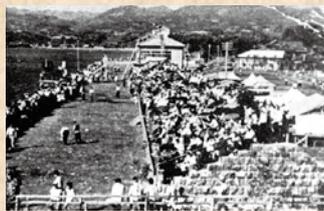
実は、当時の運輸省はじめ関係機関では、初開催こそ、今後のボートの命運をかけるものとして、東京や大阪など大都市での開催が有力とされていました。それらを跳ねのけて大村市がボートレース発祥の地となったのは、地元大村関係者の初開催にかけ

る一丸となった熱意と、迅速な取り組みによるものでした。

モーターボート競走法が公布されたのは昭和26年6月。大村



開催初期のレース風景



開催当時のファンスタンド

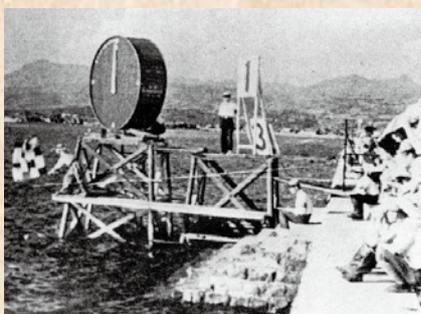
の鉄板を乗

れているのです。

市は公布と同時に競走場設置事務所を開設し、1か月後の7月にはボート場建設の工事に着手しました。そして、わずか4か月後の10月末には施設の完成に至っています。

現在、標準化されている直径2mの出走用大時計は、当時、大手時計メーカーに製作を依頼したところ75cm以上のものは製作した実績がなく、金額についても破格の100万円はかかるとの回答。しかし、地元大村の鉄工所（松永鉄工所）が名乗りを上げ、日本屈指の時計メーカーの見積りの20分の1の価格で完成させました。

また、コース旋回時の標となるターンマークも、大村によって発案されました。前例のない競技のため、醤油の四斗樽や自動車のチューブを使ったり、様々な実験を行った結果、タイヤの上に乗った鉄板を乗



開催当初の大時計とスタート風景

せるものに落ち着きました。コース設定も当時は何の規定もなく、円形・三角・四角のコースなどを日夜、試行錯誤のうえ、現在の2点マークに決定しました。

この様に、現在のボートで当たり前となっている大時計、2点マークのコース、ターンマークをはじめ、その他諸々の制度などの多くは、大村の関係者が試行錯誤の末に生み出したものがスタンダードとなっています。

参考文献 ●競艇沿革史 ●モーターボート競走年史(30、40、50年史) ●日本財団ホームページ ●2008年 BOAT Boy 5月号

連載 Vol.3



大村市モーターボート競走事業管理者 田中 克史

## 柳原市長のこと

中国には「水を飲むときには井戸を掘ったひとの恩を思い出せ」という箴言があるそうです。わたくしは、大村湾玖島崎にモーターボートの誘致運動を起した先人のことを知りたいと強く思うようになりました。

まず、当時の市長である柳原敏一氏について。何と言っても本市のモーターボートの歴史を拓かれた大恩人ですから。市長室に掲げられているお写真を見ると端正な顔立ちで知性人であることを彷彿させます。

柳原市長は、戦前実業界や官界政界に人材を輩出した上海の東亜同文書院を卒業した外交官であり、松本寅一市長のもとで助役を務められたのち昭和24年から27年まで市長を務められています。

戦中、上海領事を務めた柳原市長は、上海でドッグレースを見ておられ、周囲の人に「上海にはドッグレースというものがあつたらどうかなあ」とよく話をされていたようです。

一方、大村市では、法案が成立するひと月ほど前からモーターボート競走が密かな話題に上り、商工課長橋本義雄氏は柳原市長に進言。また、鉄工所を経営する松永辰三郎氏も市議会議員入江政吉氏を通じて市長に進言していました。

(つづく)

## 10月のレース開催日程

本場 開催	9月29日～	10月4日	JLC杯
	10月10日～	13日	島原半島ジオパーク認定2周年記念
	10月15日～	18日	MBP長崎時津開設4周年記念
	10月28日～	11月2日	GⅢ アサヒビールカップ

場 外	5日～10日	SG 全日本選手権(平和島)
	19日	GI びわこ周年
	20日～25日	GI 戸田周年・徳山オール女子
	26日～27日	GⅢ 浜名湖新鋭
	※19・20・21・26・27日はブルドラ・前売場外で発売	
ナイター	14日を除く全日ブルドラゴン、前売場外発売所で発売	